

〈新博物館のあり方部会報告〉

博物館のあり方に関する基本的な考え方（案）

目 次

1	はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	経緯 いまなぜ三重の博物館か	
2	文化振興拠点としての博物館（設置の理念・目的） ・・・・・・・・	4
	文化振興拠点部会の検討内容 県民の、特に地域に立脚した文化振興拠点 市町や民間の文化振興拠点との役割分担と連携	
3	基本的な性格 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	7
	総合博物館 地域の多様性を考慮した博物館 各機能が有機的に連動した博物館 誰もが自由に利用・参画し、楽しみながら学べる博物館	
4	博物館に求められる機能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
	博物館の基本的な機能（タテ系の機能） 収集・収蔵機能　調査・研究機能　展示・情報発信機能　閲覧・レファレン ス機能 地域・人との交流機能（ヨコ系の機能） 学習支援機能　県民参画機能　アウトリーチ機能　人材育成支援機能	
5	設置理念を実現するために、まずやらなければならないこと ・・・・・・・・	19
	学芸員等の充実 県民参画の促進	
6	第3回目以降の部会で検討すべき事項 ・・・・・・・・・・・・・・・・	20
	学芸員等必要なスタッフ体制を構築していくための方策（学校や大学との連携等） 設置場所の考え方 建物構成や規模の考え方 財政、資金等の考え方 組織および運営形態の考え方	
〔参考〕	現状の考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22
	現県立博物館の現状と課題　ほか	
〔附図〕	博物館のあり方に関する基本的な考え方のポイント ・・・・・・・・	23

〈新博物館のあり方部会報告〉

博物館のあり方に関する基本的な考え方（案）

1 はじめに

経緯

- ・ 三重県立博物館は、昭和 28 年(1953)に開館した総合博物館（自然・歴史）である。半世紀以上にわたる博物館活動によって、約 28 万点の資料が収集・収蔵されている。
- ・ 平成 4～9 年度にかけて、「センター博物館」の建設計画が進められたが、ハコモノ整備凍結の方針が決定され計画は白紙になった。以後、何度かの整備検討が行われたが、財政的な事情等により実現を見ずに至っている。
- ・ 平成 16 年度末に、建物建設の当面の見送りと暫定整備（現博物館の改修と移動展示の先行実施）の方針となったが、改修に多額の経費が必要ことが判明し、整備内容の再検討を進めている中、野呂知事の選挙公約が公表された。
- ・ 平成 19 年度、三重県文化審議会において、文化芸術や歴史的遺産などの従来の文化振興分野に、生涯学習分野などの近接領域を加えた、総合的な文化振興策を審議する中で、県立博物館のあり方についても検討することになった。

いまなぜ三重の博物館か

- ・ 現在の県立博物館は、建物の老朽化、収蔵・展示環境の不備やスペースの不足、耐震性の不備などの問題を抱えており、県立の博物館としての役割や機能を十分に果たすことができない状態にある。
- ・ 特に収蔵環境の不備は深刻であり、このままの状態が続けば、三重県の自然と歴史・文化を物語る貴重な収蔵資料を次代に確実に継承することができない。
- ・ 三重の自然や歴史・文化の資産の危機的状況は、県域全体の課題ともなっており、絶滅危惧種に代表される生物や自然環境の危機、文化財の散逸・滅失や県外流出、まつりや伝統的行事などの地域文化の衰退など、祖先から受け継いできたものが急速に失われつつある。
- ・ 三重県の特徴は、自然と歴史・文化に恵まれた多様な地域性にあるが、その集合体である三重県のアイデンティティを明確にするためには、三重県の将来像への明確な意思とビジョンを持つ必要がある。
- ・ そのためには、全県的・総合的な視野から、三重の自然や歴史・文化に関する資産を保存・継承（ストック）し、それらを活用（フロー）するための拠点となる県立博物館の整備が必要不可欠である。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 今の博物館を見たら、博物館を今つくらなければいけないことは誰でも理解できる。
- ・ 新博物館が必要だという思いは、博物館の現状を見た全員一緒だと思う。今きちんと収蔵しないと、今あるものも失われてしまう。
- ・ 県の財政は依然厳しい状況であるが、現在の県立博物館のままでいけない。倉庫管理をしっかりとやっている企業（そうした企業を活用したり、そのノウハウを取り入れるなど）があるという議論もあるが、新博物館はぜひ建てるべきである。
- ・ 一万人アンケートでは文化や博物館に対する県民ニーズが低いとの結果が出ているが、生活に直結したものと文化的なものは本来同じレベルで語れるものではない。
- ・ 博物館が必要かどうかは、政治的決断しかない。大衆的議論では、必要性和満足度の議論の中で埋没し、文化施設は破滅する。為政者の政治的決断の責任は重く、後世に責任をとることになる。三重県のアイデンティティを明確にするには、戦略的拠点施設は絶対に必要であり、将来的にどんな県にするのかという明確な意思とビジョンが示されなければならない。アイデンティティを輝かせるためには、リソース、材料をストックし、それを提示し紹介し、学習拠点に出していくフロー化が必要。博物館は、ストックとフローの二つの技術を備えなければならない。またビジョンとリソースがあっても、外部評価がなければアイデンティティは輝かない。県民がどんなに喜んでいても、県以外の人たちにそれが評価されることが本当のアイデンティティである。三重県ほどの美しい県、しかも個性連邦ともいべきこの県が総合博物館を持たないというのは、戦略的には大欠陥といわざるをえない。このまま放置していたのではだめである。
- ・ 博物館構想に、地域の文化振興や経済の活性化に役立ったり、観光の活性化に貢献できるような考え方を最初から取り込んでおけば、県民の総意が得られる可能性が非常に高いのではないか。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 近年、地域の活性化や地域力の向上などの議論が盛んになされているが、三重県がどのようなものをもっているのかをみつけだす方向で考えることが重要である。現在、三重県で推進されている、「新しい時代の公」や文化力といったことを踏まえて考えるならば、新しい博物館の存在価値をつくることが大切であろう。
- ・ これからの博物館は、社会教育とか地域を変えていく力になるべきなどといわれているが、地域力を発掘して、地域固有の文化を創っていくこと（平成16年の提言にあった「みえ学」のような視点が重要）、高齢者、社会的な弱者となった若者、子どもたちとの関係をどのようにするか（そのためには開かれた博物館であることが必要であり、研究のイメージだけでなく、賑わいも必要）、多額の経費がかかることに対する県民の理解を得る努力（最初から人々の参加を生むような工夫が必要）が必要である。
- ・ 観光目的の博物館をつくる場合、人的・スペース的・経費的にもかなりの覚

悟が迫られる。投資に対する経済的効果を出すことが求められる。観光を中心に考える場合、そのような大きなリスクを負うことを覚悟しなければならない。相乗効果を期待したいが、観光行動は、一つの県をラウンドトリップすることはなく、ほとんどがポイントだけである。なかなかそういう場所に行って、他の場所をみていくというのは難しいのが現実である。

2 文化振興拠点としての博物館（設置の理念・目的）

文化振興拠点部会の検討内容

- ・ 文化振興拠点としての県立博物館とは、地域の自然と歴史・文化に関するモノ資料を通じ、過去、現在の自然、暮らしや文化を知ること、自分や地域の今を振り返り、未来に向けて考察する拠点と位置付けられる。
- ・ 文化振興拠点としての県立博物館には、以下の役割が求められる。
 - 県民一人ひとりの成長と自己実現のための多様な支援の役割。
 - 地域のアイデンティティ（個性）が明確になり、一人ひとりのもつ力が地域に還元されることで地域の潜在的な力（ポテンシャル、可能性）と魅力を高める役割。
 - 文化振興拠点としての博物館活動を担うことができる人材育成のための中核施設的な役割。

《拠点部会 委員意見》

- ・ 広範な県域の中央拠点としての機能を果たすべく、博物館がもつべき機能を備えた三重県型の博物(館)システムを考えることができないか。
- ・ 県外の人にアピールできるようなインパクトのあるアイデアが必要
- ・ 例えば、大学で生物に関係する研究を学部の壁をなくして、機能的に連携、統合するといったことと同様に、本を読みたい、 したい、といった文化に関するニーズに対して、それを統合する頭脳としての役割を果たす機能を博物館にもたせることはできないか。この場合に、図書館や美術館の機能を統合する組織としての博物館的な発想はできないか。（この場合に、名前も変える必要があるかも知れない。）
- ・ （統合機能をもたせるという意見に対し）もっともな面もあるが、全体をカバーするのはいかなるものか。それぞれの特徴をわかりやすくしてニーズにこたえる連携をしたほうがいいのではないか。資料のあり方から整理ができないか。
- ・ 図書館、美術館と違って博物館が担うのは地域。他の拠点よりは地域との関わりを意識すべき。
- ・ 拠点としての博物館は、1つの建物を意味するのではなく、将来に向けて文化を高める博物館のような機能を果たすものを検討する。場合によっては、博物館で完結することにこだわらない議論をしてみたいかがか。

- ・ 博物館法にしばられない博物館、という考え方があるのではないか。
- ・ 新しいものをめざすなかでは、「博物館」という言葉を名称として使わなくてもよいのではないか。
- ・ 登録博物館になるかならないかは、大きな問題。(なる場合には、条件が設定される。)
- ・ 学芸員の資質が公立博物館においても大きな問題であり、このこととあわせて、P F I、指定管理といった問題について考えていく必要がある。
- ・ 県立博物館は、県内博物館の学芸員の資質を高める研修の場としての役割がある。
- ・ 博物館は、学校教育にとって、実物に触れ、体験するような意味を含めて重要な場所である。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館には博物館としての役割がある。博物館にすべて文化振興を特化して議論すべきではない。さまざまな文化振興拠点の中で、博物館の位置付けを考えるべきである。
- ・ 拠点には、博物館だけでなく、いろいろな拠点にとって指導的役割をはたす人材育成の機能、また人材育成を通じて、市町や関係施設との関係をリードしていく、ネットワークを構築していく機能がある。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 新博物館は、三重県における文化振興の拠点形成の一つの柱として、十分な内容をもって整備をしておく必要がある。三重県の歴史、文化を知り、学びぶとともに三重県「愛」をはぐくむ空間であり、学術的な面でしっかり支えられた情報発信の場としての役割を担うべきであり、その環境を人的にも整えることへの投資は惜しんではならない。この点では、イベント会場という性格で捉えることには疑問がある。

県民の、特に地域に立脚した文化振興拠点

- ・ 博物館と他の文化振興拠点との違いは、地域との関わりが強いことであり、博物館は、地域の文化を次の世代に継承するための拠点となる。
- ・ 生涯学習の拠点の一つとして、県民一人ひとりが自主的な活動と自己実現を果たす場となるとともに、相互の交流を通して、みえけん愛・地域愛を育む場となる。
- ・ 地域の履歴を記憶する装置として、地域の過去、現在をあらわし、地域づくりや地域課題解決などを支援するとともに、未来に向けた、他地域・世界に向けた地域アイデンティティの明確化・発信の場となる。
- ・ 地域の経済や観光の活性化など地域の振興に幅広く貢献する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館に必要なのは地域の文化を次の世代に継承することである。
- ・ 博物館構想に、地域の文化振興や経済の活性化に役立ったり、観光の活性化に貢献できるような考え方を最初から取り込んでおけば、県民の総意が得られる可能性が非常に高いのではないか。

《第2回部会 委員意見》

- ・ これからの博物館は、社会教育とか地域を変えていく力になるべきなどといわれているが、地域力を発掘して、地域固有の文化を創っていくことが必要である。
- ・ ミキモト真珠島博物館の来館者のほとんどは県外からの来館者である。地元にあるものを地元の人にはありがたく思わない。県立博物館にもそのようなことは当てはまるのではないかと。問題は地元の人を馴染んでもらい、地元とどうリンクするかである。

市町や民間の文化振興拠点との役割分担と連携

- ・ 三重の文化振興を担うパートナーとして市町や民間の文化振興拠点とのネットワークを構築する。
- ・ 県立の博物館でなければできないことを明確化し、市町や民間の文化振興拠点との有機的な役割分担を行う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 拠点には、博物館だけではなく、いろいろな拠点にとって指導的役割をはたす人材育成の機能、また人材育成を通じて、市町や関係施設との関係をリードしていく、ネットワークを構築していく機能がある。
- ・ 市町村の博物館等とのネットワークも、こちらに高度な機能や研究実績、技術がなければならない。頼られる博物館、手を結びたいと思われるような博物館を目指すべきである。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 文化活動がどうあるべきか、方向性を決めれば、必要な拠点(施設等の場所)・人が定まり、それにより文化活動が活性化し、拠点も充実するのではないかと。県の施設同士を有機的に結びつけることのみを考えるのではなく、市町ともうまく連携し、支援をし、眠っている施設を活性化させたい。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 市町の博物館との関係では、県立博物館が吸い上げるような関係ではなく、共存しながらやっていくことが大切である。
- ・ 三重県内にはそれぞれの地域に繋がったさまざまな博物館がある。その中で、

県立博物館はどうあるべきなのか。県内の博物館のネットワークというが、本当に実現できるのか、またそれはどのような機能を果たすことができるのかを検討する必要がある。

- ・ 県内の博物館同士のつながりがもっとあれば、県民の足ももっと博物館に向くようになるのではないか。
- ・ 東員町には、郷土資料館と郵政館というローカル館がある。新博物館と、このようなローカル館がどのような関係を選び、どのような連携ができるかに関心をもっている。
- ・ 三重県博物館協会という団体がある。これまで観光という視点での取り組みはあまりなされてこなかったが、ここでも情報発信が大切になると感じた。

3 基本的な性格

総合博物館

- ・ 自然と歴史・文化は別々に存在するものではなく、人々の生活の中で密接に関わっているものであり、三重を知るためには生活を総合的に捉える視点が重要である。
- ・ 実際の生活の中では自然も人文も一体になっており、総合的にものを見て、次に伝えていくことが大切であることから、自然系・人文系のどちらにも特化しない総合博物館とする。
- ・ 県立博物館は、三重の来し方行く末を総合的に見て、次代に伝えていくための拠点的な博物館として、展示のみならず、収集・収蔵や調査・研究なども含めた博物館活動全体において、人文系や自然系の別にとらわれない総合的な活動を行うものとする。
- ・ 総合博物館とはいっても、漠然と何でも扱うということではなく、いくつかのテーマを設定して活動を行うものとする。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館に必要なのは地域の文化を次の世代に継承することである。
- ・ 人文系か自然系かという話しあるが、たとえ自然系にしたとしても、自然の背景、文化の背景、環境なども一緒に総合的に取り扱う必要がある。固定的な通史を紹介するだけでなく、展示替えが容易にできる総合的な展示にする必要がある。
- ・ 県立博物館は県の広域中枢施設であるのだから、今はまず総合博物館を目指すべき。
- ・ 総合博物館かどうかについていうと、実際の生活の中では自然も人文も一体になっているのであるから、総合的にものを見て、次に伝えていくことが大切である。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 博物館の性格については、単一の性格ではなく、現在の収蔵品や今後のことを見ずると歴史・文化・自然の領域を主とした総合博物館が妥当で、将来的にそれが発展・展開することは、今後の博物館活動や県民がそれをいかに活用するかにかかっている。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 総合博物館ということについては、概ねの了解があると考えてよいであろう。ただし、何でもありの、特色のない博物館となってはいけない。社会に開かれた博物館としてのコンセプトをもつことが必要である。それによって、どのような展示、収蔵、機能を重視するか、学芸員をはじめどのようなスタッフが必要かといったことも見えてくるのではないか。
- ・ 総合であっても、テーマ(コンセプト)が一番大事になってくると思う。教育か、後継者育成か、文化か、あるいは地域に対しての発信かなど。博物館は明るいイメージがなくて、暗いイメージの方が多い。行ってワクワクする楽しい、県外の人、子どもたちにも見せてやろう、休みの時にはそこに行こう、というものがなければ、人を集めるのは難しいであろう。
- ・ 博物館である以上、イベント会場と同様ではない。例えば温故知新、故きを温ねて新しきを知るといったようなことが中になければならないであろうし、それにはテーマが必要になってくるのではないか。県外の人に、こんないいものがあると伝えられるようにするべきであり、このためにはネットワークが大切になってこよう。
- ・ 県立博物館は、今回まったく新しいものをつくるわけではなく、これまで県立博物館は長年運営されてきており、すでに収集・収蔵、調査・研究、ある意味で展示も含めて、すべて行われている。今さら、もう一回原点にもどって、資料の収集、整理、調査研究をしたりするのは時間の無駄である。
- ・ 28万点の資料はたいへんな収蔵量であるが、総合というのは、何でもあるが、これだというものが無いところが弱いところであり、総合博物館として県民にとって魅力的な博物館になるためには、百貨店と同様に、規模が大きくなってしまわないか。
- ・ 財源的な制約の中で実現させることを考えると、総合博物館を目指すことが意見の大勢を占めているが、これからつくる博物館は本当に「総合博物館」でよいのだろうか。今までできていなかったことや、やろうとしたが今の博物館施設ではできなかったことを整理し、新しい博物館ではこれができるようにするといったことがはっきりしてこない、いくらよいハコモノをつくっても中身のない博物館になるのではないか一番心配である。
- ・ 福井県立歴史博物館をつくる時、金太郎飴のように県の名前をはずしたら、他の県立博物館と違いがないことにならないよう心がけられている。総合博物館にするかどうかであるが、三重県から情報発信して三重県に集客する視点も大切である。
- ・ 総合博物館についてであるが、人文系と自然系を対立的に捉えるのではなく、三重県が誇るものを総体的に捉えて、文化を発信することが大事である。

- ・ 総合博物館にとってもテーマ（個々の企画テーマ）は大切である。ただし、固定的なものとなってしまうのはダメであり、計画的なテーマの転換が必要である。
- ・ 総合博物館の「総合」とは、総花的にするということではない。団子にたとえるならば、博物館は串であり、さまざまなテーマが個々の団子にあたる。総合博物館の展示は、団子のように、多様なテーマ（個々の企画テーマ）の中から組み合わせを考えて、つなげて示すようなものである。
- ・ 総合博物館について議論する際、展示中心になりがちであるが、収集収蔵や調査研究なども含めて博物館活動全体の中で捉える必要がある。展示だけでなく、モノやヒトなどを総合的に捉えることも必要である。その意味で、公文書館機能についても、総合的な見地から、一体化などについて総合的に検討を進めていくべきであろう。
- ・ かつてのセンター博物館のほか、中央博物館、中核的博物館など、呼び方はいろいろ考えられると思うが、新しい県立博物館は、一つのテーマ（分野）にとらわれない館であるべきであろう。
- ・ 自然系か人文系かという問題であるが、現県立博物館に両分野の資料がある以上、どちらかを取捨することはできないのではないか。

地域の多様性を考慮した博物館

- ・ 三重県の特性は多様な地域性にあることから、県立博物館は、それぞれの地域性を活かしながら、それらを総合的にカバーして捉える視点が必要である。
- ・ 県立博物館は、地域の多様性を背景にしたさまざまな性格をもつ県内の博物館施設を有機的に結びつけるネットワークの中核的な施設としての博物館活動を行うことにより、県内の博物館がそれぞれの独自性とその魅力を発揮させ、それらが集まった総体が「みえの博物館」として機能するための先導的な役割を担う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 県内の4つの地域の特徴をカバーするのは県立博物館の役割だと思う。そのためには人材が必要である。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 三重県は地域性が多様なので、それらを交代で順次展示していくとか、固定展示ではなくて1年単位で入れ替えていくとか、最初から完成したらそれで終わりではなく、そこからスタートして、1年後、2年後、3年後というように年次的な計画をきちんと立ててやっていくことが重要であろう。その意味では、常設展示も固定的に考える必要はないであろう。
- ・ 博物館での活動だけでなく、県内のすみずみにまで目配りした博物館活動を行うべきである。

各機能が有機的に連動した博物館

- ・ 県立博物館では、資料を確実に次代に伝える収蔵機能だけでなく、県民が博物館をさまざまなかたちで活用し、博物館活動に主体的に参画できる機能を両立させた活動を行うものとする。
- ・ 県立博物館が、県内の博物館ネットワークの中で中核的な役割を果たすためには、収集・収蔵から調査・研究、展示・公開などにわたるすべての博物館活動を有機的に結合させたノウハウをもつ必要がある。それにより、人材育成や技術支援などの機能も有効に発揮させるものとする。
- ・ 公文書館機能の対象となる資料は、博物館資料の内容とも重なる歴史資料であり、併設や一体化など、両者の機能が効果的に発揮できるあり方を検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ これからの博物館には、歴史遺産をきちんと保存できる収蔵機能とアクティブな文化拠点としての両方の機能が求められている。収蔵は非常に大切であるが、そのような地道な活動だけがしっかりとしていけば、県民にとって本当によいかということそうではないであろう。県民が、新しい発見をしたり、つながったり、具体的な行動ができるようなアクティブな機能も求められている。現実的にはアクティブな機能と、土台としての収蔵の両方をうまく結び付けることが求められているのではないか。
- ・ 博物館のあるべき姿について、美術館・博物館は、インスティテュートであり、単なるファシリティ、施設ではない。研究機能・収蔵技術、学芸員や専門の研究者が多くいてこそ輝く施設であり、人的資源・技術的資源と一体化したものであるということをもっと明確にする必要がある。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 事前に送付された検討資料(素案)を見た際には、博物館の機能として三重県のアイデンティティを育てるといのは具体的にどういうことなのか、発信や人と人つなげるネットワークの機能、三重県をアピールし、県内のいろいろなところが好きになり、行きたくさせるような拠点となる観光的な視点、の以上3点が弱いように感じていた。今回の検討資料では、まだのアイデンティティの部分弱いのではないか。また、総合的でありすぎである。これをどのように実現していくかが重要になってくるであろう。前回の部会では、収蔵機能とアクティブな活動の両立について指摘したが、どこを強調すべきかを考える必要があるのではないか。

誰もが自由に利用・参画し、楽しみながら学べる博物館

- ・ 子どもからおとなまで、世代を超えて楽しみながら学べる博物館とする。
- ・ 障がい者や外国人など、誰もが利用できるよう配慮した博物館活動を行う。
- ・ 一度の利用で終わるのではなく、身近で恒常的に利用できる施設として、何度でも

訪れたいくなるような、リピーターを絶えず生み出す博物館活動を行う。

- ・ 県民一人ひとりが自己実現できる場となり、相互に交流しながら、博物館活動に主体的に参画できる博物館とする。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 子どもの頃に博物館に行き、モノの面白さを知ることによって、世代を超えて伝わっていくものもあるのではないか。

《第2回部会 委員意見》

- ・ これからの博物館は、高齢者、社会的な弱者となった若者、子どもたちとの関係をどのようにするか（そのためには開かれた博物館であることが必要であり、研究のイメージだけでなく、にぎわいも必要）が必要である。
- ・ 県民が期待している博物館は、学術研究中心なところではなく、行ってみたい、調査や研究に参加して、一緒に勉強してみたいと思えるようなところではないか。展示にしても、次は何を見られるかといった期待をもっているのだと思う。それらのウエイトをどのような位置付けにするかが定まってくると、具体的な博物館像も見えてくるだろう。
- ・ 障がい者や外国人などへの対応も位置付けられているが、本当にここまですべてできるのか考えた方がよい。あれもこれも入れてしまってよいのか、本当にできるのか慎重に考えるべきである。例えば、まずは「配慮する」くらいの表現にとどめたほうがよいのではないか。
- ・ 親子で楽しめる博物館について、例えば、親が子どもだった少し昔の生活を実際に体験できるような展示企画はできないか。常設ではなく季節限定で行うのもよいのではないか。

4 博物館に求められる機能

博物館の基本的な機能（タテ系の機能）

収集・収蔵機能

- ・ 現県立博物館の収蔵環境では、資料が劣化する危険性が高い状況にあり、まず約28万点の館蔵資料を安全かつ効率的に保存できる収蔵環境の確保が第一の課題である。
- ・ 三重の自然と歴史・文化の資産が失われる危機にある昨今の動向に対して、全県的な見地から県立博物館としての資料の収集・収蔵の方針を定めて、地元保存主義を原則とした県内の博物館施設等との役割分担の体制を構築し、収集・収蔵活動を行う。
- ・ 県内の博物館の内容や所蔵資料のデータベースを構築し、県内の資料収蔵ネットワークを整備する。

- ・ 将来的な収蔵庫の増設計画を構想段階から盛り込むことを検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 今きちんと収蔵しないと、今あるものも失われてしまう。三重県の博物館が、今ここにある博物館のままで今まで継続してきたこと自体を本来は恥じなければいけないのではないかと。博物館にとって収蔵がまず大事なことである。
- ・ モノはそのままでは何もいわない。そこからどれだけ情報を引き出すかが博物館の一番大事な機能ではないか。放っておくと、モノはゴミになる。博物館では、モノをきちんとならべて、そこから情報を引き出す体系をつくっていくことが大切である。
- ・ 現在の県立博物館の収蔵環境では資料が泣いているのではないかと思う。次の世代に文化を伝えていくのが我々の務めである。
- ・ モノを扱う場合、入れっぱなしではダメである。モノは生きている。魂の入ったハコモノ、中身の詰まったハコモノをつくる必要がある。
- ・ 現状からみれば、県立博物館はかなり力を入れてきちんと（施設の整備を）すべき。モノが持っている情報を調べて引き出していくことが大事であり、単に置いてあるだけではダメである。
- ・ 効率的な収蔵を行うことが大事である。三重県の長い立地を考えた場合、収蔵品をうまく活用する方法として、学校の空き教室の活用などによるサテライト展示などを考えるべきである。
- ・ 収蔵庫はどんどん膨れていく。増殖できる博物館、成長する博物館というコンセプトを先に打ち出すべきである。
- ・ 県立博物館は収蔵機能を持たない博物館としてスタートした。以来、さまざまモノの寄贈を受けてきた。現在の県立博物館の施設では、博物館としての十分な役割を果たせない。新しい博物館を建ててほしいというのが県立博物館の長年の念願である。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 現在の県立博物館の収蔵・展示場では、これまでに収集された多数の資料、寄贈された資料などを知り、それを通して学ぶ機会を私たちは失っている状態である。特に収蔵に関しては、限界に来ていると見てよい。この点で早急に収蔵への方策を施すべきであるが、既存の建物等の利用ということでは、博物館事業の展開の上で、また将来的に収蔵資料の価値を落としかねない危惧を覚える。モノを扱う上での基本的な収蔵の観点より最初からその目的を持った施設として構築することがふさわしいと考える。
- ・ 博物館を、収蔵、展示、研究、未来への提示と4つに機能を分けると、ハード、ソフトが中心で、そのバランスが重要である。ハードは収蔵に特化して、設備の整った収蔵倉庫を建築し、展示は一部簡素にしたものを併設する。展示は現県立博物館のリニューアル・収蔵に使われている部分などを改築するなどする。また各地の展示施設と協力しサテライト展示場として機能してもらおう。研究は収蔵庫に併設した研究所を中心に、未来への提示はこの研究所を中心に展示企画なども行う。
- ・ 三重県には先進的な倉庫業を営む企業もありそのロジスティクスのノウハウ

を利用し、世界に例を見ない先進的な収蔵システムを構築する。三重県のノウハウとして将来は世界の収蔵と展示施設の企画に生きてくる。

- ・ 収蔵品に関しては、生活文化に関する資料についても大切にしてもらいたい。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 新しい博物館を考える時、やはり現在ある資料をどのようによい状態で保存して、その整理・研究の成果を、展示などによりいかに県民にあらわすことができるかがまず大切ではないか。博物館の機能を広げていくのはよいが、それらが本当に実現できるかどうかの見極めが大事である。

調査・研究機能

- ・ 学芸員の人員を確保し、博物館独自の調査・研究機能を十分に保持・向上させることができるようにする。
- ・ 他機関（博物館・大学等）との共同研究や、県の関係機関をはじめ内外の研究者に客員研究員・協力研究員などになって、博物館の調査・研究活動に参画してもらうなどして、調査・研究機能を活発化し、地域課題の解決や地域振興に役立つシンクタンク的な機能を果たす。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館が独自に研究できる部分をきちんと持っておくことも必要である。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 国内外の博物館・研究機関等との学術的な交流にも積極的に取り組むべきであろう。
- ・ 滋賀県立琵琶湖博物館や兵庫県立人と自然の博物館には非常にたくさんの専門職員がいる。しかし、三重県でこのような職員数を確保することは難しいであろう。埋蔵文化財センター、県史編さんグループ、農業試験場などの県立施設の専門職員を巻き込んで博物館として完結するような仕組みを考えるべきであろう。各部署の研究者が博物館活動に参加することは、専門の研究の視野を広めるためにも、広範な研究活動が県民の目に触れるようになるという意味でも、有益なことであり、博物館を中心に各種研究活動が集約されることで、博物館の総合性を高めてほしい。

展示・情報発信機能

- ・ 県立博物館における展示機能とはどのようにあるべきかについて検討したうえで、大規模で固定的な常設展示エリアと展覧会等を開催する企画展示エリアからなる従来の博物館展示の関係の見直しを行う。

- ・ 従来常設展示と位置付けられてきた展示エリアについて、固定的な展示ではなく、展示替えが容易にできる仕組みとするなどの工夫を行う。
- ・ 館内の展示だけでなく、県内の博物館施設等と連携した館外展示などを行う。
- ・ 博物館活動を通じて、「三重県」を内外に発信していく。
- ・ 展示活動と併せて、館蔵資料をはじめ、博物館のもつさまざまな情報を、県内はもとより広く全国に発信する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 人文系か自然系かという話しがあるが、たとえ自然系にしたとしても、自然の背景、文化の背景、環境なども一緒に総合的に取り扱う必要がある。固定的な通史を紹介するだけでなく、展示替えが容易にできる総合的な展示にする必要があろう。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 展示スペース等に関しては慎重に考えるべき。財源との折り合いのつく規模を考えていくべき。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 総合博物館について議論する際、展示中心になりがちであるが、収集・収蔵や調査研究なども含めて博物館活動全体の中で捉える必要がある。
- ・ 資料をしっかりと収蔵して次代に継承できるようにしたうえで、何のために収蔵する必要があるのかを県民に公開する場として、展示機能は重要である。
- ・ 総合博物館にとってもテーマ（個々の企画テーマ）は大切である。ただし、固定的なものとなってはダメであり、計画的なテーマの転換が必要である。
- ・ 博物館の展示は、固定的で展示替えのできないようなものではダメである。
- ・ 福井県立歴史博物館をつくる時、金太郎船のように県の名前をはずしたら、他の県立博物館と違いがないことにならないようにした。総合博物館にするかどうかでは、三重県から情報発信して三重県に集客する視点も大切である。
- ・ 三重県らしいとは何なのかが問題となるが、それは何も一度にやらなくてもよいのではないか。例えば福井県立歴史博物館では、昭和の暮らしコーナーや一般的な通史的展示を止めて、現代から逆に古代にさかのぼりながら展示替えしていくトピックス展示など、他にない工夫をしている。
- ・ 三重県は地域性が多様なので、それらを交代で順次展示していくとか、固定展示ではなくて1年単位で入れ替えていくとか、最初から完成したらそれで終わりではなく、そこからスタートして、1年後、2年後、3年後というように年次的な計画をきちんと立ててやっていくことが重要であろう。その意味では、常設展示も固定的に考える必要はないであろう。
- ・ 県民のための充実した施設をつくるということと、県外からの集客の拠点としての充実も考えるべき。アスト津の三重県観光連盟と津市の観光協会にいったが、さまざまな民間施設のパンフレットはあったが、県立博物館と美術館のパンフレットはなかった。情報発信をしっかりと考えていくべき。

閲覧・レファレンス機能

- ・ これまでの博物館では、展示機能が博物館資料の活用を中心であったが、資料の閲覧やレファレンスの機能を展示機能と並ぶ重要な機能として位置付けることにより、県民が博物館資料を活用できる幅を広げる。
- ・ 公文書館の収蔵資料は、歴史資料として選別された公文書と古文書などであり、歴史資料を残すという役割でいえば、博物館と機能的に共通するものであることから、そのあり方や、博物館との一体的な整備について検討する。
- ・ 公文書館機能のほかにも、閲覧・レファレンス機能の近接領域である図書館や生涯学習センターなどの文化振興拠点施設との効率的・効果的な連携のあり方も検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 人文系か自然系かという話しあるが、たとえ自然系にしたとしても、自然の背景、文化の背景、環境なども一緒に総合的に取り扱う必要がある。固定的な通史を紹介するだけでなく、展示替えが容易にできる総合的な展示にする必要がある。
- ・ 県民が実際に収蔵品を見ることができ、子どもたちが未来に夢が描けるような博物館が必要だと思う。
- ・ これから目指すべき新しい博物館は、きちんとした収蔵に裏打ちされたモノを、ビビッドな提示の仕方で問いかけ、受け止められるものであるべきだ。
- ・ 効率的な収蔵を行うことが大事である。三重県の長い立地を考えた場合、収蔵品をうまく活用する方法として、学校の空き教室の活用などによるサテライト展示などを考えるべきである。
- ・ 美術館は作品を鑑賞してもらうところであるが、博物館で派手な企画展示をしようとする、数千万円規模のお金がかかってしまう。県の目指す博物館はそのようなものではないであろう。
- ・ 公文書館については、併設かどうかの議論はあろうが、この機会に十分に整えていくべきであろう。
- ・ 公文書館を併設するならば、総合文化センターゾーンに置くべき。例えば図書館との連携、生涯学習との連携などと一体化して考えた方が効果的であり効率的ではないか

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 博物館の性格については、単一の性格ではなく、現在の収蔵品や今後のことを見ると歴史・文化・自然の領域を主とした総合博物館が妥当で、将来的にそれが発展・展開することは、今後の博物館活動や県民がそれをいかに活用するかにかかっている。
- ・ 公文書の扱いについては、古文書だけでなく、近現代の資料も将来の資産として蓄積して行く必要がある。資料の収蔵という点で、博物館と公文書館とは機能的に共通するところがあり、この機会に一体的に捉えてそのあり方を

考えるべきではないか。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 総合博物館について議論する際、展示中心になりがちであるが、収集・收藏や調査・研究なども含めて博物館活動全体の中で捉える必要がある。 展示だけでなく、モノやヒトなどを総合的に捉えることも必要である。その意味で、公文書館機能についても、総合的な見地から、一体化などについて総合的に検討を進めていくべきであろう。

地域・人との交流機能（ヨコ系の機能）

学習支援機能

- ・ 誰もが気軽に立ち寄り、交流する中で、楽しく学ぶことができる博物館とする。
- ・ 県民の自己実現を支援する生涯学習の拠点の一つとして、博物館活動に則した多様な学習機会を提供する。とりわけ、モノ資料を素材とした学習活動など、博物館にしかできないプログラムを積極的に実践する。
- ・ 学校教育との連携を密にし、遠足・社会見学、出前授業などの学校教育活動に対して、学校の学習課程に十分に対応した支援活動を行う。
- ・ 子どもたちが、三重の自然と歴史・文化に対する興味や関心を深められるような博物館活動を行い、三重の将来を担う子どもたちの育成に寄与する。

《拠点部会 委員意見》

- ・ 博物館は、学校教育にとって、実物に触れ、体験するような意味を含めて重要な場所である。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 子どもの頃に博物館に行き、モノの面白さを知ることによって、世代を超えて伝わっていくものもあるのではないか。
- ・ 県民が実際に収蔵品を見ることができる、子どもたちが未来に夢が描けるような博物館が必要だと思う。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 伊賀では、子ども入場を無料にする記念日を設定するなどして、必ず一度は伊賀の施設を利用してもらえるような工夫をしている。個人や団体が一度は博物館に足を運ぶ仕組みと仕掛けが必要ではないか。
- ・ 金沢21世紀美術館では、小学生全員が一度は、美術館に来館してもらうよう学校と連携している。欧米では、小さい年齢から、ミュージアムに親しむ環境ができています。地域に資料を持って出かけていくことも大事であるが、一部の資料しかもっていくことはできず、限定的な博物館利用になってしまう。

県内の小学生に一度は県立博物館を見学してもらう仕組みをつくることが必要ではないか。将来を担う人材への投資としてお金をかけることも大事ではないか。

県民参画機能

- ・ 収集・収蔵、調査・研究、展示などの博物館活動に対して、県民の参画を得ながら、県民とともに作る博物館を実現する。
- ・ 県民にも、博物館の運営方針の決定や活動の評価への参画をしてもらい、県民とともに成長する博物館を目指す。
- ・ 県民が主体的に博物館活動へ参画する取り組みとして、平成 18 年度より実践中のサポートスタッフ事業を発展させるとともに、さまざまな世代の県民が、多様なかたちで博物館活動に参画できる環境を整える。

《第 2 回部会 委員意見》

- ・ 考古クラブなどがある高校と連携して、学生ボランティアの協力を得るなどしてもよいのではないか。

アウトリーチ機能

- ・ 博物館内だけに博物館活動を限定させずに、県内全域をフィールドとした活動を展開する。
- ・ そのために、県内各地の博物館等の文化振興拠点施設や地域の諸団体・県民などとの協働で、地域資料の収集、調査活動や館外展示などのアウトリーチ活動を行う。
- ・ 例えば、県立博物館の所蔵資料を紹介する移動展示だけでなく、市町立・民間の博物館と共同して行う資料調査・研究活動や企画展、地域の団体等を支援または協働して取り組む展示会やフィールドワークの開催などが考えられる。

《第 1 回部会 委員意見》

- ・ 効率的な収蔵を行うことが大事である。三重県の長い立地を考えた場合、収蔵品をうまく活用する方法として、学校の空き教室の活用などによるサテライト展示などを考えるべきである。

《第 2 回部会 委員意見》

- ・ 博物館での活動だけでなく、県内のすみずみにまで目配りした博物館活動を行うべきである。
- ・ アウトリーチ活動については、自分にとって何の関係もないと思っている人に対するアプローチという視点が必要である。

④ 人材育成支援機能

- ・ 自館の人材育成だけでなく、県内の博物館をはじめとした文化振興拠点施設とのパートナーシップに基づき、拠点を担う人材の育成や技術支援を行う。

《拠点部会 委員意見》

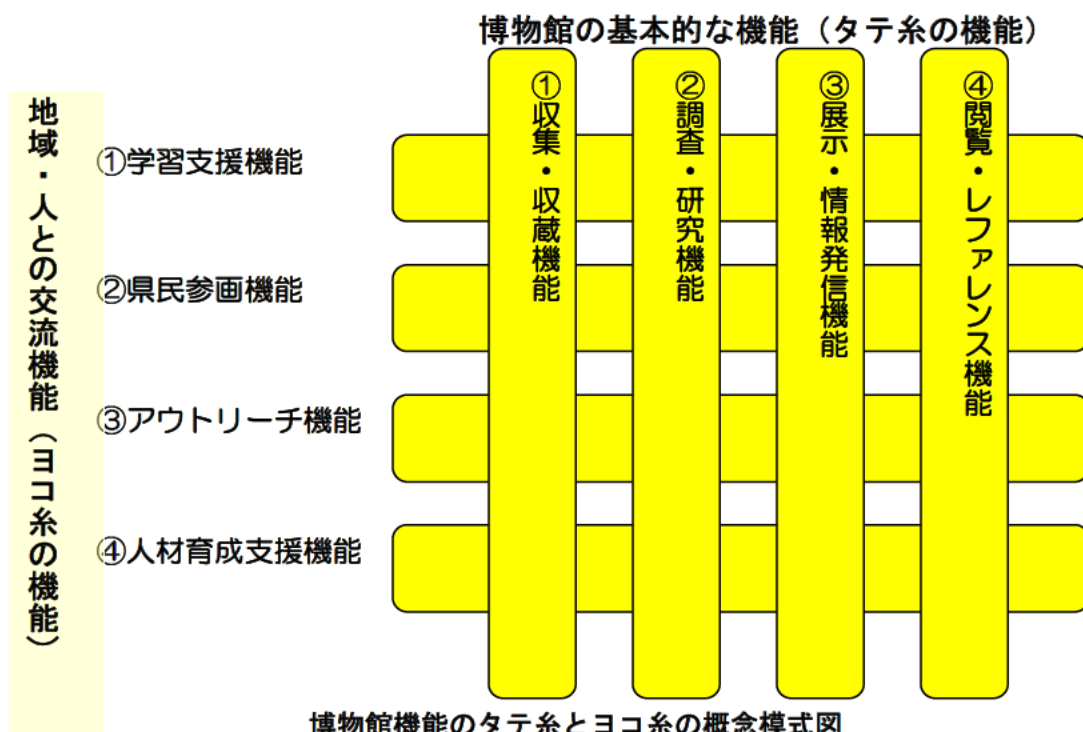
- ・ 県立博物館は、県内博物館の学芸員の資質を高める研修の場としての役割がある。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 拠点には、博物館だけではなく、いろいろな拠点にとって指導的役割をはたす人材育成の機能、また人材育成を通じて、市町や関係施設との関係をリードしていく、ネットワークを構築していく機能がある。
- ・ 市町村の博物館等とのネットワークも、こちらに高度な機能や研究実績、技術がなければならない。頼られる博物館、手を結びたいと思われるような博物館を目指すべきである。
- ・ 博物館のあるべき姿について、美術館・博物館は、インスティテュートであり、単なるファシリティ、施設ではない。研究機能・収集技術、学芸員や専門の研究者が多くいてこそ輝く施設であり、人的資源・技術的資源と一体化したものであるということをもっと明確にする必要がある。
- ・ 専門職としてその位置づけを明確化し、内部的な育成とともに、館外の人材の育成が図れるようにすべき。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 市町の博物館との関係では、県立博物館が吸い上げるような関係ではなく、共存しながらやっていくことが大切である。



5 設置理念を実現するために、まずやらなければならないこと

学芸員等の充実

- ・ 学芸員をはじめ県立博物館の活動を担う人材の育成とレベルの向上をはかり、博物館開館と同時に100%の活動ができる体制を整える。
- ・ 博物館が地域のアイデンティティと密着した施設であることを認識し、実践ができる学芸員を計画的に確保する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 新博物館を整備する場合、ハードだけではダメであり、それを動かしていく学芸員を減らさず、増やし、レベルを上げることが大事である。
- ・ 博物館のあるべき姿について、美術館・博物館は、インスティテュートであり、単なるファシリティ、施設ではない。研究機能・収蔵技術、学芸員や専門の研究者が多くいてこそ輝く施設であり、人的資源・技術的資源と一体化したものであるということをもっと明確にする必要がある。ここの記述が今までないということ記録に止めてもらえれば、もっと防波堤になるのではないか。インスティテュートであるということの意味をもっと明確にしてほしい。博物館は、地域のアイデンティティ、特性、個性と密着した施設であり、それを確認し理解し、そこから逃げない、流出しない人材によって支えられなければならない。博物館の場合は、移動する学芸員、渡り学芸員のような人たちでは困る。

《意見書として別途いただいた委員意見》

- ・ 専門職としてその位置づけを明確化し、内部的な育成とともに、館外の人材の育成が図れるようにすべき。行政職として勤務先が変わるとかえって館の力が発揮できないのではないか。専門職としては研究・教育・管理運営の資質が求められるが、それら全てに通じた人材であるべきかどうかは慎重に検討が必要であり、実際にその職にある方々の意見は十分に聞くべきだ。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 新しい博物館を担う学芸員などの人のレベルアップは、今から取りかからなければならない。早い段階から学芸員の充実をはかる必要がある。このためには、大学との連携も必要であろう。
- ・ 日本の学芸員は、欧米のミュージアムにおける分業体制（キュレーター・エデュケーター・コンサバターなど）に対して、何でもこなさなければならない現状から「雑芸員」などと呼ばれている。近年の博物館には、多様な機能が求められるようになってきており、学芸員だけにすべての業務を任せるのは大変である。コンピューター技術者、観光に通じた広報担当者、学校の教員など、三重県が抱える専門的技術をもった専門的職員を動員できる体制ができないか。
- ・ 博物館活動を円滑かつ発展的に進めるためには、適材適所への職員配置や、

さまざまな専門技術をもった人々との協力が必要である。

- ・ このような博物館活動を実現するためには、現在のような学芸員の人数では不足であり、もっと多くの人数を確保することが重要であろう。元気な博物館には、研究者（学芸員）の研究活動が活発に行われているものである。新博物館は、ぜひそのようにあってほしい。

県民参画の促進

- ・ 現在の県立博物館で取り組んでいる「サポートスタッフ」制度の促進をはじめ、県民参画型の取り組みを開館に先駆けて進める。
- ・ 新博物館の整備が、県民の理解と支援のもとで進められるよう、PRやプレ博物館活動などの取り組みを行う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 例えば県民債（1人1万円程度の）を発行する方法もあるであろう。
- ・ 県民全員の総意で、盛り上げられることができるような博物館構想を考えていくとよいのではないかと思う。そうすれば長い目にわたって、21世紀にわたって継続的な運営がやりやすい博物館構想になるのではないか。
- ・ 財源に関して、みんなでお金を出してもらうという発想は楽しい博物館づくりになるのではないかと思う。本当の県民参画になるのではないか。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 県民からバックアップしてもらえる環境づくりも重要である。
- ・ これからの博物館は、多額の経費がかかることに対する県民の理解を得る努力（最初から人々の参加を生むような工夫が必要）が必要である。
- ・ 地元になんなものがあると知ってもらうことが大事ではないか。例えば、津市でいうならば、中核的な県の施設が集中し、そうした公共施設を県に依存している状況ある。津市民にもっと理解してもらい、応援してもらう必要があるのではないか。

6 第3回目以降の部会で検討すべき事項

上記について検討を深めるとともに、以下の項目についても新たに検討を進める。

学芸員等必要なスタッフ体制を構築していくための方策（学校や大学との連携等）

設置場所の考え方

建物構成や規模の考え方

財源、資金等の考え方

組織および運営形態の考え方

- ・ 直営のほか、指定管理者制度、P F Iなどの手法について、他の博物館への導入事例の調査を踏まえて、長期的に安定した博物館運営ができる運営形態を検討する。
- ・ 自己評価システムと外部評価システムを導入するなど、絶えず自己革新をはかれる博物館のあり方を検討する。
- ・ 博物館の機能を十分に発揮させるために、総合的なマネジメントのあり方を検討する必要がある。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 100億円程度であれば、県の起債で対応することもやり方によっては可能であろう。また民間の力を導入するなど知恵を出すことによって、長期的に効率的な運用ができる博物館をつくることもできると思う。
- ・ 例えば県民債（1人1万円程度の）を発行する方法もあるであろう。
- ・ 文化にはお金がかかる。それだけの覚悟が必要である。
- ・ 新しい博物館には、自己革新の機能を入れるべきである。自己評価システムを内部で開発するとともに、外部の評価も導入すべき。

《第2回部会 委員意見》

- ・ 博物館機能をタテ系（博物館の基本的な機能）とヨコ系（地域・人との交流機能）に分けて説明する整理はわかりやすいが、これらを総合的にマネジメントする視点がないと達成することは難しいのではないか。
- ・ 民間企業では、社長（トップ）の考え方を末端まで浸透させ、それを組織として機能させないと、なかなか本来あるべき姿にならないのが一般的である。理想的な姿でまとめられた内容を、どのようにやっていけば達成できるのかという議論が必要ではないか。
- ・ 地元の評価してもらうためには、県外などの外部から評価されることが大切である。
- ・ 外国からお客さんに三重県を案内する時、まず伊勢神宮、次ぎに伊賀の忍者屋敷、そしてその次ぎに展覧会をやっていけば、県立美術館に行くことが多い。県立博物館はというと、県外からのお客さんを案内するには、大変に残念な状況である。現博物館のある場所は駅から近く、非常に環境がよいが、風致地区などの規制もあり、建て替え整備は難しく、関連施設が集まった総合文化センター周辺が最適な地だと思う。

〔参考〕 現状の考察

現県立博物館の現状と課題 ほか

- ・ 県立博物館は、展示陳列機能のみの博物館として開館した。別用途の部屋を収蔵庫として流用するなどして博物館活動を進めてきたが、近年の多様な役割や機能を求められる博物館活動に十分な対応ができない状況である。
- ・ 施設の老朽化、展示・収蔵環境の不備などから、収集・収蔵、調査・研究、展示などの博物館としての基本的な機能を果たせていない状況にある。
- ・ 現在地での建替え・増築も土地利用制限から困難な状況にある。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 県立博物館は収蔵機能を持たない博物館としてスタートした。以来、さまざまなモノの寄贈を受けてきた。現在の県立博物館の施設では、博物館としての十分な役割を果たせない。新しい博物館を建ててほしいというのが県立博物館の長年の念願である。
- ・ 施設の老朽化、収蔵スペース・環境の不備、耐震性能の不備などから、収蔵資料をしっかりと次代に伝えることが困難な状態。
- ・ 現在の県立博物館の収蔵環境では資料が泣いているのではないかと思う。次の世代に文化を伝えていくのが我々の務めである。